

津市埋蔵文化財センター情報

まいぶん津

2010. 1. 5
第7号



国指定史跡 長野氏城跡（西の城・中の城・東の城、西から）

国指定史跡 長野氏城跡

(美里町 桂畑・北長野)

長野氏城跡とは、美里町桂畑の山上にある長野城と美里町北長野の伊賀街道を見下ろす丘陵にある東の城、中の城、西の城の4箇所の城跡の総称で、昭和57年に国の史跡に指定されました。

長野氏は南北朝時代から戦国時代にかけて活躍した国人領主で、一族の中から室町幕府に直属する奉公衆を出すなど、幕府からその実力を高く評価されていました。長野氏の一族には、雲林院・草生・分部・家所などの諸氏がいて、これらを従えて、安濃郡と奄芸郡を中心に活動していました。隣接する北畠氏や関氏と戦いを繰り返す一方、北勢方面にも積極的に進出しようとしていました。しかしながら、北畠氏が戦国大名への足取りを強めると、北畠具藤を養子に迎えて、その傘下に入りました。さらに永禄11年(1568)、織田信長の伊勢侵攻が激しくなると、今度は具藤を追放し、信長の弟信包を養子に迎え、信長の支配下に入りました。

4箇所の城のうち、長野城は遠く伊勢湾を見下ろす標高約540mの山頂に所在しています。麓の集落との比高差は約360mもあり、これは県内でも有数の高さを誇ります。長野城の名称は、『太平記』の延文5年(1360)と延文6年(1361)の記事に初めて登場します。室町幕府の有力者の一人である伊勢国守護仁木義

長がこの城に立て籠もり、幕府追討軍と籠城戦となるが、要害のため寄手が近寄れないと記されています。

尾根に沿って東西に小さな郭を階段状に配置しており、主郭は一段高いところに東西35m×南北15mの規模で、北・西・南側は低い土塁で囲んで築かれており、南中央に虎口をもちます。

東の城、中の城、西の城は標高200m程度の丘陵に築かれており、伊賀街道沿いの集落との比高差は約50mです。このうち、東の城の規模は東西約90m×南北約110mの不整形な楕円形を呈します。北西には谷を挟んで中の城があり、北側の尾根づたいに西の城に通じています。

中の城は、東西約50m×南北約200mの規模で南北に細長く、主郭の北側には2条の堀があり、尾根づたいに西の城に至ります。

西の城は、東西150m×南北約140mの規模で、中央部の幅約20mの主郭を中心に、四方の尾根づたいに階段状に郭が続いています。

東の城、中の城、西の城は、中の城を中心に3城が一体となって機能していたものと考えられますが、地形的にも構造的にも居住性に乏しいものです。文献にみられる長野氏の居館跡は今のところ現地で確認されておらず、今後の課題となっています。(村木一弥)



遺跡位置図(1:40,000)(国土地理院『佐田』1:25,000より)



長野城跡(北東から)

資料紹介 北畠氏館跡出土の小札^{こざね}

国指定史跡^{たげきたばたけ しじょうかん あと}多気北畠氏城館跡(北畠氏館跡・霧山城跡)は、雲出川の支流^{はてまたがわ}八手俣川上流の美杉町多気地域にある遺跡で、室町から戦国時代に南伊勢地方を治めた北畠氏が本拠とした場所です。今回は、史跡の中心である北畠氏館跡から出土した小札という甲冑の部品について紹介します。

小札とは、甲冑の胴・袖・草摺^{くさずり}などに用いられる長さ5～7cmほどの縦長の部品のことです。一般的には鉄や革で作られ、表面に黒漆を施したものが多く、現存する甲冑にも多く見られます。使用される場所や種類によって数の異なる孔が開けられ、この孔に革や紐^{なめしがわ}を通して縦横に組みます。実際に甲冑は、右図のようにこの小札を何枚も組んでできあがっています。

出土した小札はどれも鉄製で、表面の一部に黒漆が残るものもあります。紐を通す孔はいずれも2列で、残りの良いものを見ると12～14箇所あるようです。大きさは幅が18mm前後のものと24mm前後のものの2種類あり、ほぼ形が残っているもので長さが60～76mmです。また、上端の形状の違い等から、大小斜めの山が二つの小札頭伊予札^{こざねがしらい よざね}(1・2)、上端全体が斜



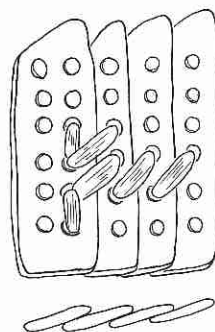
北畠氏館跡位置図(1:50,000)(国土地理院『伊勢奥津』1:25,000より)

めの盛上本小札^{もりあげほん こざね}(3)、一文字頭伊予札(4)、基石^{ごいしがしらい よざね}に似た丸い形の基石頭伊予札(5～8)の4種類に分けられます。4は室町時代後期から江戸時代初期、その他はいずれも室町時代のものと考えられています。

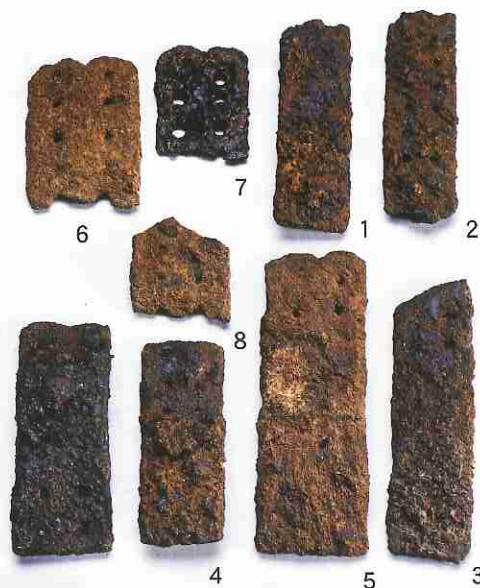
北畠氏館跡で出土した小札は今のところ8枚のみです。出土した場所は集中していますが、数が少なく修理等に使う部品だったのかも知れません。小札は一つの甲冑に大量に使用しますから、館跡には他にもまだ小札が眠っている可能性があります。(石淵誠人)



北畠氏頭能公出陣図より
(美杉ふるさと資料館蔵)



小札模式図



多気北畠氏城館跡出土小札

特集 津市の中世城館

津市には中世(鎌倉時代～戦国時代)の城館が112箇所あります。城館は山頂や丘陵の自然地形を巧みに利用し築城されたもので、支配領域内の防衛や交通の要所などに設けられています。市内には鎌倉時代の城館は少なく、室町時代以降に築かれたものが多くあります。その背景には、この時期に美杉町に本拠を置き南勢地域を支配した北畠氏と、美里町に本拠を置き中勢北部地域を支配した長野氏の二大勢力があり、両勢力は領域支配等を巡り対立していたと考えられています。

では、市内の代表的な城館を紹介します。

かわ きた

川北城跡

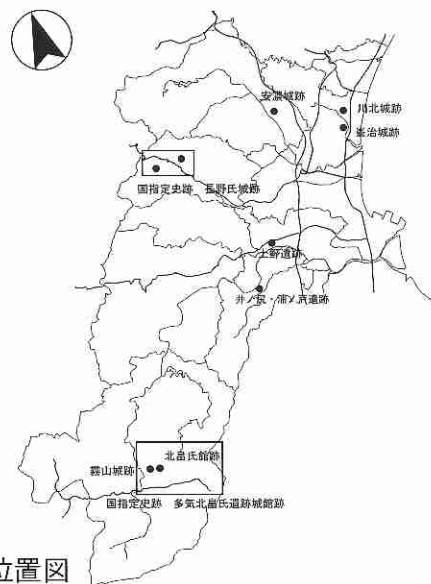
津市の北部を流れる志登茂川の北岸には低丘陵があり、川北城跡はその東端近くに位置しています。南西に伸びる斜面に堀、土塁などが築かれ、眼下には志登茂川の形成した平野を見下ろすことができます。

昭和53年・59年に住宅団地造成工事に伴って発掘調査が行われ、ほぼ全域の様相が明らかになりました。

調査の結果、堀や土塁によって区切られた7つの区画が明らかになり、その内部では多数の掘立柱建物、井戸などが確認されています。中心となる区画は、幅3m程の堀で囲まれた東西約70m、南北約50mの大規模なもので、この区画の東から南にかけて堀を共有しながら6つの小区画が見られます。また、こ



川北城跡（北西から）



中世城館位置図

の北側には掘立柱建物が若干見られるものの、平坦な空間地が広がっています。戦時を意識した砦的な造りではなく、平時の居館としての性格が強いものです。

出土した遺物は土器が中心で、尾張産の山茶碗・山皿が多数出土しており、土師器の鍋・釜などの日常雑器の他、青磁・白磁など中国から輸入された高級陶磁器があります。

築かれた時期は、鎌倉時代中頃の13世紀中葉、在地に根ざした有力者層によるものと考えられ、その後14世紀頃までで継続しています。中世屋敷地の全貌が明らかになった例として貴重な遺跡です。（米山浩之）

みね

峯治城跡

峯治城跡は、一身田上津部田に所在した大



峯治城跡（北西から）

規模な城館です。安濃川と志登茂川に挟まれ、北西から細く長く伸びる低丘陵の先端部にあって、南北東の三方向に眺望が利く場所に立地します。戦前の土取りによって城域南側は大きく破壊されていましたが、標高約20mの最高所の主郭から北側に向かって階段状に連なる郭が配置され、各々の郭では掘立柱建物や井戸が確認されました。また、郭と郭を区画する溝では大量の貝殻が廃棄された状態で見つかるなど、この城が普段の生活を伴った城館であったことがわかります。

主郭から西側に延びる尾根を分断するような急峻な堀切2条が直交する形で設けられ、防御を高めるための工夫が見られます。出土遺物から15～16世紀に機能した城であることがわかりました。

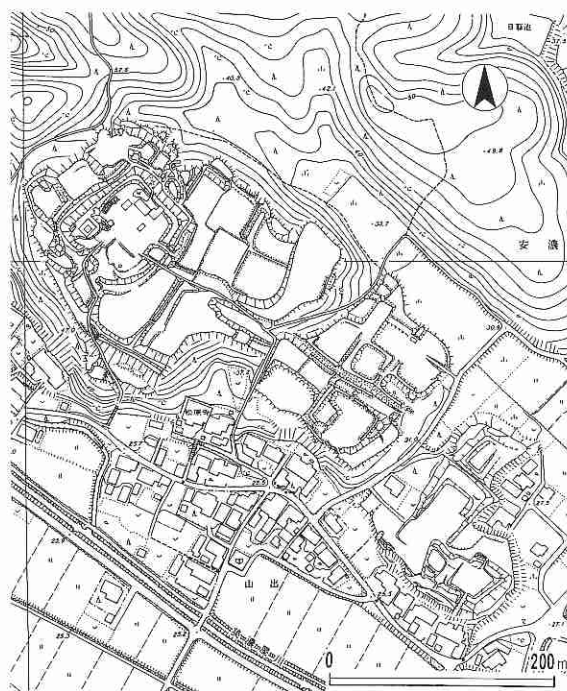
さて、江戸時代の地誌『伊勢名勝志』によると、峯治城は佐脇勝久が応永年中に築城し、永禄11年(1568)に織田信長による伊勢侵攻によって滅びたとされます。また、『伊勢一国旧城跡附』には「御城屋敷跡三ヶ所有」との記述があります。峯治城がそのひとつで、西側に500mほど離れた場所にある上津部田城跡とは、その規模と存続時期との関係から、本城と支城の関係にあったとも想定され、このあたりにおける中世後期の城跡のありかたを示す一例です。(中村光司)

あ の う 安濃城跡

安濃城跡は、安濃川左岸の標高30～60mの丘陵上に立地します。北側には谷水田、南側には美濃屋川があり、その比高差は約20mあります。

規模は東西約450m、南北約350mで、^{こうじ}弘治年間^{ほそ}に美里町に本拠を置いた長野氏一族の細野^{のふじみつ}藤光が築城したといわれています。

北西部の丘陵最高所(現在の阿^あ由^ゆ多^た神社)に主郭があり、南東方向に大小の郭が連なっています。主郭は土塁と堀に囲まれ、規模は南北70m、東西60m、南西隅に櫓台状地が残っ



安濃城跡実測図(『古城雑記』第218号 2001年より)

ています。また、主郭の東に虎口があり、虎口から東へ通路が伸びています。通路の南北には郭があり、家臣の屋敷地ではないかと推測されています。

永禄11年(1568)に織田信長の伊勢侵攻の際、安濃城も攻撃されましたが、落城しなかったと伝えられています。(田中秀和)

う え の 上野遺跡

上野遺跡は雲出川中流左岸、戸木町の標高26～30mの段丘上に位置する遺跡です。平成11～16年度に住宅団地造成に伴い約92,000㎡が発掘調査され、14世紀初頭から16世紀前半の屋敷地群、16世紀後半の堀・土塁などが検



上野遺跡の堀と土塁(北西から)

出されました。

幅50～80cm、深さ30～50cmの溝によって方形に区割りされた屋敷地は、一辺が40mを超えるものから20mに満たないものまで、その規模は様々ですが、30区画以上が検出されました。屋敷地からは掘立柱建物や井戸などのほか、一部では鋳物の工房と考えられる遺構も見つかっています。屋敷地と屋敷地の間には道路も確認されており、上野遺跡が整備された大規模な中世集落であったことが明らかになりました。

また、遺跡南東の一角には、集落の一部を壊して、鉤形に屈曲した堀と土塁が築かれています。堀の長さは東西約110m、幅4～6m、深さ2～3m。土塁は幅約3m、残存する高さは1.8mで、16世紀後半の城郭の一部と考えられています。

上野遺跡周辺には、戸木城跡、宮山城跡、城山城跡などの中世城館が多く存在し、これらの城館跡と上野遺跡の城郭遺構との関連が注目されています。(藤田充子)

いのり 浦のと 井ノ尻・浦ノ戸遺跡

井ノ尻・浦ノ戸遺跡は、一志町八太に所在する遺跡で、雲出川の支流である波瀬川右岸の段丘上に位置しています。

調査区全体では、平行する大きな溝をはじめ、掘立柱建物や井戸などが多数確認されています。時期は鎌倉時代前半と室町時代後半

に分かれますが、室町時代が大半を占めています。特に断面がV字形をした溝や、集石土坑と重複し途切れる溝など、遺跡の性格を考える上で重要な溝も確認されています。これらは、その規模や構造から見て、確実に防御目的に築かれたものと考えられます。

また、前回のニュース6号では、当遺跡の土坑墓1から出土した青磁碗類を紹介しました。一般的に中世墓に輸入陶磁器を副葬する例は少なく、特に7点まとめて埋納する例は県内でも極めて稀です。

防御目的の区画溝をはじめ、希少な青磁碗類の出土などから見て、当遺跡は一般集落とは異なり、「居館」としての性格を持っていたものと推測されます。

さて、当遺跡から西へ約500mの丘陵上には、八太城跡が位置しています。防御機能を持った居館の近くに山城が築かれている点は、相互の関係も含めて非常に興味深いものがあります。(伊勢野久好)



井ノ尻・浦ノ戸遺跡調査区全景（南から）

編集後記

今年度から特集を組んで、市内の遺跡を紹介していくことにしました。今回は、「中世城館」を特集し、城から見た当時の武士生活のあり方を考えてみました。如何に戦を勝ち抜き、国を防衛するかの知恵が垣間見えたような気がするの、私だけでしょうか・・・。(編集子)

発行日：平成22年1月5日
編集発行：津市埋蔵文化財センター
〒514-0058
三重県津市安東町1225
TEL 059-229-0210
FAX 059-229-4601
印刷：森田印刷株式会社